教え子の悲しみを背負われて

吉村, 秀子 / Yoshimura, Hideko

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

34

(終了ページ / End Page)

35

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002655>

教え子の悲しみを背負われて

吉村 秀子

「五月二十五日、今日は雨だった」これはハワイから私に届いた先生の葉書きの書き出しである。ハワイ大学の客員教授として、充実した研究生活を送っておられるであろう先生からの葉書きに胸が詰まった。大学の窓辺を流れる平和の風に、降りしきる雨の中を南風、原陸軍病院から南部へ撤退する教え子の姿をみつめておられたと思われる。

喜屋武断崖の上で米兵の前に自決しようとした私達は、先生のお言葉でよみがえり羽地の米海軍真喜屋病院で同胞の看護に当たった。ある日先生が来られた。予科一年の下地美代子さんがコザに一人で住んでいるので、宮古に帰るまで親代わりになって一緒に生活してほしいと言われた。アメリカ兵の車を拾って乗り継ぎ、石川から来られたとのことだった。交通機関や通信手段が皆無の時に教え子のことを掌握されてはるばる羽地まで来られた先生のお心思った。

昭和二十六年ごろ、先生は危険をおかして木造のポンポン船で戦没生徒の慰霊のため、宮古に来られた。山里トヨさんの仏前で、カバンから線香とマッチを出されて焼香された先生、溢れる涙を拭か

れた先生が私の心に焼きついている。平良市を終えて砂川の狩俣キヨさん宅へ向かう途中で、宮古高校校門際の椰子の実を見上げて立ち止まられた。「椰子を植えたいね。椰子の木は高くなるからひめゆりの塔からも見えるでしょう。実がなったら皆さんが汁を飲みに来るかも知れない」と言われた。池間島在住の長浜照子さん（旧玉寄）にお願いしてお届けした。

ひめゆりの農場跡に建つ真和志中学校校門側にひめゆりの校門の象徴である相思樹が植えられたら先生はお喜びになり、大城盛吉校長先生にお礼のため、わざわざ来校された。教え子の悲しみを背負い続けられた先生、後ろ盾であられた先生は旅立たれた。お疲れ様でございました。さぞ重かったこととでございましょう。有難うございました。どうぞ安らかにお休み下さいませ。合掌